



博文館記念書翰集

第三四号

其一

18  
71  
1



博文館記念書翰集

其一

卷之四

18  
71  
1

2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8





大橋新太郎君

卷中目次

明治三十四年  
一月一日







卷中目次

大橋新太郎君

明治二十四年  
一月一日

川崎三郎氏

大正九年  
五月十二日

松井廣吉氏

十二月十日

内山正如氏

大正十年  
月十七日

巖谷小波氏

大正六年  
六月廿一日

大町桂月氏

二月八日

江見水蔭氏

明治二十三年  
六月十七日

玉床種徳氏

明治二十五年  
十月十三日

浮田和民氏

明治三十二年  
一月二十五日

本多精一氏

十二月十六日

淺田彦一氏

明治三十五年  
五月十一日

以上





Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 15 vertical columns of characters. The text is written on a rectangular piece of paper pasted onto a larger sheet.

Handwritten signature or name, possibly reading '平五郎' (Heigorō), written in a stylized cursive hand.

Small rectangular stamp or seal impression, likely a collector's or library's mark, located below the main text.





牛北山伏所二九  
坪谷善四郎  
川崎三郎  
五月十日

大正九年五月三日  
東京市京橋區日吉町  
國民新聞社編輯局  
電話  
二五五五五五五七七  
二〇九四二一〇〇  
郵政特准掛號認爲新聞紙類

從所 善多介 足多  
考多介

所者 運麻場 神務 紋  
心兵家 一常 一財 再 財

在七不 捲土 重才 才 期 已  
前途 好运 才 新 才 已

不吉  
五月十日  
川崎



新報

大正九年五月三日

東京市京橋區日吉町  
國民新聞社編輯局

電話  
二五五五  
二五五五  
二五五五  
二五五五

復元 善多 何 足 多

若 如 乃 一

呼 者 運 麻 場 神 務 致

心 兵 家 之 常 一 敗 再 敗

臣 七 不 捲 上 章 才 之 期 已

前 途 之 好 運 之 祈 一 之 也

不 宜

五月十日

山 崎

水 哉 國 道 是 也 手 案 下





坪谷善平 様  
③ 謹啓

松井 啓

謹啓

友人 草野 啓 様 宛 (白井)

遠年 々々 迄 へ 迄 迄 迄

市 撥 丹 市 作 へ 之 件 々

親 友 々 々 々 々 々 々 々 々

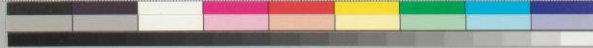
顔 々 々 々 々 々 々 々 々 々

下 等 々 々 中 々 々 々 々 々

可 而 々 々 々 々 々 々 々 々

三月 廿 日 遊 矣

松 井



松井

謹啓

友人 草井 樹庵 君 (高井)

遠平 氏 之 息 云 云 之 事 新 聞

市 樓 丹 市 作 氏 之 件 事

親 交 之 事 亦 亦 亦 亦

顔 之 以 之 際 母 之 事 亦

不 解 用 中 之 事 亦 亦

可 而 時 々 々 々 々 々

幸 月 十 日 游 夫

松 井

水 井 氏 之 事

伊 藤

2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8



東島弟  
 親分区上六巻  
 大橋園子と彼長  
 増屋下様  
 中願  
 相外漢之可  
 庵之内山正好  
 改  
 口  
 改

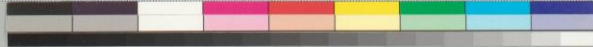


4

中願

漢製印 江氏愛用

2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8





復  
程  
望  
引  
愧

牛込区小幡町  
坪谷葉四郎殿  
中央  
育  
巖  
東京 芝浦區船場町五十三  
番三二五七七

2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8



復  
 程  
 望  
 引  
 愧

牛  
 坪  
 中  
 5  
 庚  
 6.21  
 巖  
 庚  
 庚

2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8









方外山子院  
四山二小教  
修心小經  
竹是五  
下子中  
甲  
午無  
如式  
如式

2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8



年己巳北山伏所二十九

坪谷善四郎様  
侍史



三月廿日

小石川新司宅可貞

大町若春

院落静裡

弟新難を打

讀仕、過乃

御褒は敢へて

當り申す下

御心也此女院





当り申下  
御心もいふ  
金玉の御之音也  
頂戴しと拙著  
為名光彩也  
昔一甲の漢  
御禮申上  
其の御心  
御自玉事  
申候、也

三日習 芳乃

坪 氏 為 丁 其 堂  
侍 史



東京市日本橋區  
本町博覧館  
坪谷水鏡  
西月

尾の道  
江見水鏡

此書稿ハ明治二十五年六月太陽出版會刊「海の日」發行  
の記者を得て爲た江見氏を肝付他軍少将兼行「龍行」  
といふ九州へ派遣し途中の交信なり坪谷水鏡附記

吹夕出雲可仕の処 橋本安政旅談 杉山展道若長  
將軍の一行を招き致し 陸而小生も驛展に附す  
と云譯で天書撮別席に小生を問はず  
結核三名立現けりも 水色絡酒の腰巻を  
見せしむる曲絶のまゝ 今日止す  
満引くくささ流の如く 船入下機  
下いかけり 夕風を辭す一燈は  
畫船に席を移し申しん 江に似たり  
海上より市街の燈心を眺りあかぬ  
美人の酌に氷入のビール かんれ飲み  
ふけんえふと 果ては 武人も文士も  
酒の多しあらず 小生得意の  
詩吟 海上雲舟を やよいし 句え、声  
がッホの賞替を 携り  
船を新地の河岸へ つぎ海よつぎ出でた  
調鶴樓の新館へ 車中 大醉





船を新地の河岸へつぎに海より出でた  
調鶴樓の新産穀を轉じて大酔  
せる栄少佐は返つて海中に墮り  
た、ヤ多言の戦死を遂げしやうと  
幸ひして杉山右衛門長を引上り

(二)

少佐は平氣で帰れども、  
調鶴樓の跡に入り、又々縁側より  
轉げ落ちてソレで日警の  
カッパレを跡り、又々洋燈  
を倒し申へ

縁故加はりて八名いづれも無難  
無能はかゝる美は差かあり文藝の  
材料を口實に、  
分捕申へ

將軍 尾道竹枝の(自作) 此方  
を唄つて曰く

船は津より津へ船であつ

備後の尾道

瀬戸下り

少佐は橋本氏と壯んて居歎し  
小生は、杉山氏と古いま合戦し  
大愉快を極めん

(三)

あゝいんさな子之で懐中が  
少しも痛まぬな 何んぞ

果敢て地川、流山、彦州

今も歳はゆき、  
場合よりては、  
百箇でちり、  
一生一得

お方、  
お方、  
お方、









日本橋本町廿又参  
坪谷善四郎様  
主様

十月廿二

岡谷行徳

水哉老台付更 種徳  
拜復

岩田比那病、由太平洋  
ノ山岸ヨリ受ケル 何ッ其レ甚  
シキヤ 買上 送販 原稿送リ  
方ニ 間意ヒトシ 由意外ニ  
ノシ 多ク 智入ニ 夫 昨朝 起 牀  
咽ヨク 止 血アリ 電 活ニシテ  
医シ 喉ト 診 断ヲ 受ケテ 夫 處  
ニ 氣 管ニ 執ラ 生 心 居ル 由ニ



ンキヤ買上巡販原稿送り  
 方ニ開意ヒリシ由意外ラハ  
 ノシマシ智入ニ夫昨朝志林  
 咽ヨウ出血ナリ電活ニシ  
 医シ喉心診断ヲ受ケテ夫處  
 氣管ニ熱ヲ生シ居ル由ニ  
 嗽スレハ殊ニ左ノ肝ニ痛ニシ  
 受テ夫医ハ外出ラ存元シ夫  
 一ト田山氏ノ不在ニ有リ明後  
 月晴ニハ登鏡可致存矣計  
 杯ハ紅シ居テ夫未ニ入り又亦ラ  
 出テ居ラ南ケテ外ニ歸ラヤリ  
 秋シ居ルニシ由坐夫次子ニ此  
 ノ二面人物松在此一ト藤田富  
 氏ノ由テカ右ニ夫調査モセカリシ  
 田山氏早動定マテ旅行ニ赴キシトナ  
 シ公ニテ定宿ニシテ湯ハ生湯人久持  
 男ニ夫松本ノ方見聞ノ者有之矣  
 一ト藤田氏ハ丸ヲ無之不完全ニ  
 智ヲ入矣唯大伴ニシテモヒシク夫ト  
 白ドナクツク田山氏ハ力証シテ人  
 物ツカハシテ下ルサニ夫松本ノ方見聞ノ  
 足跡ニ夫松本ノ方見聞ノ者有之矣  
 保長氏ニ夫松本ノ方見聞ノ者有之矣  
 不立





日本橋区本町三丁目  
傳文館編輯部  
9  
坪谷善一郎様



東京都豊島区高田四丁目十七  
澤田和民

古く経済部の高田君の手紙  
ありて予も此より或る東京見の  
本多精一郎に旧來の友人と云  
ふし関係をつくる事よきしけ  
ばせぬ淡おけし  
昨日大橋君は東京の澤大田人  
の経済意見は稱賛受取ぬる  
所為念及して何と云ふ  
ゆえに冬録をよけ謝儀  
を申す也

澤田和民謹言  
澤田和民

2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8



付為念也 何之委阿  
唯以冬節之什臨溪  
方中々也

湯君有朝浦竹、庄山路  
之く、三月より、毎月人物  
海海と出元と、又右竹、滝邊  
又藝圃内、又右方を、  
と、以上條件、毎日、  
の謝儀、又、執筆、信札、  
交、異儀、之、  
右、  
如、  
冬、  
月、  
以下、

一月廿五日  
信乃氏

坪六喜四郎様



哲文館

坪内善四郎様

(10)

林英吉君様

幸

本多 祐一

哲文館に贈るに  
上は拙作を  
意匠先目知人  
雄二は或る林英吉  
ト申す人、原稿  
能く其の原稿  
業作其の原稿  
シテ貴館に  
下は其の如何





中上之極也... 意成之先日... 惟之... 上申不人... 業生... 之... 予... 在... 之... 向... 上... 大... 也...

十一月十日

枯石

括五水封元

括五



東京日本橋本町  
傳文館  
堀谷屋  
打春

十  
清  
清  
清

内子端出多忙  
以推字中  
花對  
序  
乃  
動  
東  
想  
長







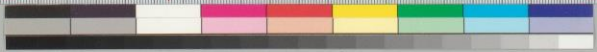
何事も心苦く限りある  
氣しあきらみれば體打  
こしく抱強弱をい  
存るは偏重自は上流  
必を仰ぎ申す

其内氣を在る如く  
淨宗可化相習は  
中土を奉る如く  
相習

山形に清浄子身を在る  
得たるは事蹟に  
古き事と云ふは  
以て下は相水子身

まゝ  
有る

經云様受



經子抄卷

...

2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8

